

米原歴史街道

米原市の歴史・文化財を歩く 88

御薬袋順三郎と教え子たち(その1)

— まいばらの先人 ⑩ —

彦根藩士の子として生まれる

柏原で「西の薬師」として親しまれている泉明院は、比叡山を開いた伝教大師が布教に出かけられたとき、この地に金色に輝く光がさしたことから、大師自ら薬師如来を刻まれ安置されたのが始まりと伝えられています。中山道を行く旅人の信仰厚く、街道筋には西薬師へ導く道しるべがのこされています。

西薬師の山門ほど近くには、明治三二年(二八九九)、教え子たちによって建てられた「御薬袋先生碑」があります。真正面に伊吹山、左に西薬師、右手に自現境川のせせらぎを聞き、春はウワミズザクラの香りがたよう木立の中に御薬袋順三郎の顕彰碑があります。

順三郎は元の姓を「北村」といい、彦根藩士の子として安政五年頃(一八五八)生まれました。「北村」の先祖

は、もと甲斐の国(山梨県)の武田武士だったそうです。明治一三年頃、縁あって同じ彦根藩の薬袋家へ婿入りすることになりました。順三郎二三才、妻の菊千代一六才の頃といわれ、このとき「薬袋」の姓に「御」を冠して「御薬袋」にしたといえます。薬袋とは変わった姓ですが「みない」または「みなえ」と呼びます。彦根藩士薬袋家初代も甲斐国出身で武田家の旧臣でした。井伊直政が上野国箕輪城(群馬県)にいた天正一八年(一五九〇)頃、井伊家に仕え、関ヶ原の戦いや大阪の陣に出陣して、一五〇石を拝領して鍛冶奉行や煙硝奉行を務めました。

順三郎は幼い頃、なかなかの「やんちゃ坊主」だったようですが、よく学問もして奇童とよばれました。成長してからは、学校の先生として滋賀県下の小学校をあちこち回られ、その教育観・人間像は早くから世間

の知るところとなります。明治二〇年四月、第八代の校長兼訓導として柏原へ赴任してこられました。当時は、まだ柏原小学校といわず開文小学校と呼ばれていた時代です。その教育観は、終始「五〇年・百年先に大きく夢を馳せ」「自分を育ててくれたいふるさとの恩を忘れないこと」に一貫していたといえます。子どもたちが生まれ育った柏原の史跡・文化財・伝承や、村のために尽くしてこられた人物などを引き合いにして、わかりやすく噛み砕いた話を繰り返してにされたようです。そのひたむきさが、子どもたちにふるさと柏原の良さ、それを誇りに将来もこの地に住み、村のために尽くそうという心を芽生えさせ、育てていきました。

放課後をまって、教え子たちはよく先生を宿直室に訪ね、熱い語り口で英語や音楽を教えられたそうです。広く世界に目を向けさせるためです。子どもたちは、いつも夢中で聞き、五線譜に踊るオタマジヤクシ。アルファベットをつづつた横文字。歌ったり、聞いたことのない英語を話す先生に、海外への夢が膨らみ、目が輝いたことでしょう。

また、書をよくし、頼まれると「枕石」の号で襖書き、軸物などの揮毫もされたといえます。

しかし、柏原へ赴任して五年目の明治二五年七月八日、人々に惜しまれながら亡くなりました。時に三五才。七回忌にあたり、志し半ばで逝かれた先生の死を悼む教え子らが顕彰碑を建てました。基壇の石には教え子たち大勢の名前が刻まれ足元を支えています。教育観もさることながら、御薬袋順三郎その人の「人柄」「生き様」「情熱」に強い感銘・薫陶を受けた教え子は、その遺志を継いで、村に新道をつけたり、青年学校を建てたり、壬申の乱などの戦乱で亡くなった人たちの碑を建てたりして、故郷の今日の発展に尽くしました。次回紹介します。

(歴史・文化財保護室)



▲ 御薬袋順三郎